

# 古高取通信

平成26年 2月

## 古高取を伝える会会報

### 直方の高取焼



古高取

目次	
古高取の魅力伝える	2
古高取の広場	3
活動の記録	5
なんでも掲示板	7
古高取紹介	8

昨年の夏、本会の精神的な支えであった  
 荻迫先生が亡くなりました。

先生は昭和三十五年直方に料理専門  
 学校を設立し、四十五年間に亘り多く  
 の女性の教育に情熱を傾けてこられ、  
 料理研究家として、食文化の向上に尽  
 くされた功績は計り知れません。

本会の発足時には、副会長として頑  
 張っていただきました。

第一回の「古高取窯跡探訪・紅葉ウォ  
 ーキング」のとき、『初めて窯が築かれ  
 た約四百年前のこと、山々の緑、吹く  
 風にさえも片時も忘れられなかったで  
 あろう故郷に想いを馳せながら、遠い  
 異国の地で焼物を作りつづけねばなら  
 なかった「八山」とその一族の運命を  
 思うとき、無言の焼き物に籠められた  
 「祈り」を感じずにはいられません。』  
 と綴られました。

私達は、この「想い」を引き継いで、  
 会の運営にあたっていききたいと思っ  
 ています。

隅田 知明  
 合掌

## 古高取の魅力伝える

故きを温ねて新しきを知る

副会長 末松 登志子

カラスが鳴かない日があっても  
官兵衛、官兵衛と見聞きしない日  
がない程になってきました。

いよいよ、はじまり、はじまり  
黒田官兵衛の孫三人、忠之(福岡  
城主)、長興(秋月藩主)、高政(直方  
藩主)

直方は御用窯発祥の地、関係が  
無いわけではない。・・・のに・・・  
盛り上がりが無くこれではいかん  
と「新しきを知る」ということで  
永満寺の現在高取焼の看板を揚げ  
て作陶されている先生をお訪ねし  
ました。

高取焼清水窯(花公園入り口)の  
先生は直接何も出来ないけど協力は  
惜しまないと言って下さいまし  
た。干支の(午)土鈴作りに疲れき  
っていると話されていました。七  
百個以上作られる干支はもう一回  
りしたそうです。

赤地に白の(午)が浮かび飛び跳  
ねていて良い年になりそうな予感



がしました。

内ヶ磯友枝窯(畑より上頓野柚  
の木に抜ける所)は直方に窯を開  
いて四十年近くになるそうです。  
高取の土を使つての作陶をずっと  
続けておられるそうです。落ち着  
いた色合いの優しい作品が並んで  
いました。水曜日の夜の陶芸教室  
におじゃましました。生徒さん達  
は、多少石も混じっていることも  
あるけど自由に作っていると楽し  
そうでした。作陶から釉薬がけ窯  
出しをトータルに体験されている  
様子です。

嬉しかったのは生徒さんの中に

直方東小学校での陶芸教室に参加  
された親子(父・娘)がいて、東小  
の体験で陶芸に目覚めたとのこと  
でした。ここでも繋がっていると  
気をよくしました。

高取焼末吉窯(副会長の明元寺  
からの横道※昔この通りは鷹取城  
の城下町であったとされる)は農  
道を進むと末吉窯の看板があり、  
細い道でも上まで車で上れます。  
発色作用の異なる釉薬を掛け分け、  
その融合がもたらす景色を愉しむ。  
それが高取焼の特徴、まるで桂林  
を思わせるような景色に焼き上が  
ったお茶碗を拝見させていただき  
ました。地元の土をベースに土を  
足で踏み機械に頼らず足蹴りの轆  
轤を使い薪をくべて焼く「次世代  
に継承するためにこの技法で続け  
ている」とのことでした。

JALの十二月号(SKYWAR  
RD)に掲載された記事をそのま  
ま引用させて頂きます。

「このあたりの土は個性が強い  
んです。一筋縄ではいけません。要  
するに癖がある。それを力づくで  
抑えようとする駄目。癖を分か  
つてやりながら、こっちは陶襟を  
開いて友達になるつもりで接しま  
す」

何だか人の気質をも連想させる。



末吉さんは言葉をつないだ。  
「でもいっぺん友達になったら、  
こげないいい奴はおらんちゅうぐ  
らいの関係になりますよ」  
薪ストーブにあたりながらホカ  
ホカ気分の上に手にすっぽり入る  
丸みを帯びた大きな温かみのある  
茶碗で熱いお茶をいただきながら  
心の中もほっかりでした。

地元の高取焼窯元で四月と十月  
の最終の金・土・日曜日に陶器ま  
つりが行われます。  
同時期に花公園にて高取焼展示  
会を開催する予定です。

## 古高取の広場

中野等先生を迎えて

理事 副島 邦弘

本年度の古高取基礎研修講座のまとめの最終講義として、「文禄・慶長の役（豊臣政権の大陸侵攻）」ということでお話を願った。

講義の概要は以下の通りです。

天正十五年（一五八七）関白秀吉の海外制覇の野望とその前夜、五月に島津を降ろして九州をおさ



えた。この時秀吉は北政所（ねね）に、「老岐も対馬も従い、朝鮮王国に日本の内裏へ参洛するよう申しつけるが、もし参洛しなければ、来年成敗する。自分の生きていうちに明国を手に入れるのだ。」とその抱負を告げている。ここに秀吉の征服構想は具体性をおびていった。

まず、九州平定を完了した六月に、秀吉は宗氏に対馬一国の安堵とひきかえに、朝鮮国王を服属させよという命令を、秀吉の日本全国統一を祝う通信使派遣の要請にすりかえて折衝。朝鮮側、日本を「篡弒の国」とみなしてこれを断わる。天正十七年（一五八九）八月秀吉は宗氏に重ねて朝鮮国王を隷属させるよう命令。これにより博多聖福寺の僧景轍玄蘇が正使、宗義智が副使となつて朝鮮に渡り、朝鮮側に日本への通信使派遣を重ねて要請した。九月朝鮮側、日本統一を祝賀する通信使派遣を決定した。翌年天正十八年一月秀吉、これを服属使節と思い込み、朝鮮国王に「征明嚮導」（明征服の先導）を命ずる国書を与えた。

天正十九年（一五九一）二月朝鮮通信使帰国復命。正使黄允吉は、秀吉は攻められて来ると復命、副使金誠一は、秀吉は攻めて来ない



と復命。同行した日本側の景轍玄蘇・宗家老臣柳川調信らは「征明嚮導」を「仮途入明」にすり替え朝鮮側と折衝。秀吉は十月に明征服の本営として、黒田如水に繩張りを命じ肥前名護屋に築城普請を始める。十一月秀吉関白職を秀次に譲り太閤となる。

天正二十年（一五九二）四月、十六万の兵を朝鮮に送った。これを予期しなかった朝鮮側は防戦したものの敗北を重ね、同年五月漢城（ソウル）が陥落、朝鮮国王は平壤そして義州に難を避け、明の救援を仰いだ。日本軍は小西行長が平壤、加藤清正が咸鏡道まで侵

入するなど朝鮮全域の支配をめざし、朝鮮農民から兵糧の挑発をした。しかし朝鮮各地での義兵決起、朝鮮水軍による補給路遮断、明軍もいち早く朝鮮を救援した。ここに日本軍は武器・兵糧不足に陥った。翌年一月七日、李如松の率いる明軍は小西行長の拠る平壤を陥れ、漢城めざして南下したが、碧蹄館で小早川隆景らの日本軍の反撃にあい戦意を喪失した。このあと日明間で講和の機運がもちあがり、朝鮮側の反対をおしきって講和交渉が進められた。秀吉は日明講和交渉で、明皇帝の皇女を日本の天皇の妃にすること、日明間の勘合を復活し官船・商船を往来させること、朝鮮南四道の日本割譲など議条件七ヶ条を提示したがいれられず、明皇帝からは「茲に爾を封じて日本国王と為す。」と、のみで、講和交渉は破綻。秀吉は朝鮮南四道を武力で奪うため、慶長元年朝鮮に約十四万を再派遣。七月、日本軍は慶尚道巨濟島で元均の率いる朝鮮水軍を破り、八月全羅道南原城を陥れた。これに対し明・朝鮮側も反撃の態勢を固め、十二月蔚山新城の包囲、翌慶長二年十月四川新城の攻撃を行った。翌三年八月秀吉の死を機に日本軍は十月から撤退を始め、十一月末



島津勢を殿に巨済島を離れ対馬へ撤退した。この侵略で朝鮮抗日組織指導者の惨殺、朝鮮民衆の鼻切りなどの残虐行為のほか、農民・陶工・学者など朝鮮人捕虜の日本強制連行を行った。この慶長の役は朝鮮南四道割譲が目的であり、文禄の役との大きな違いである。また、この裏には世界的な奴隷貿易が見え隠れしている。

美しき人、  
荻迫喜代子先生をしのんで

柴田 ムツ子

「おにぎりにこだわって」の先生のお言葉に、人の美しさ、本物の美しさとは何かということを改めて考えさせられました。

ある禅僧が、物と情報があふれ、変化の激しい世の中で、日本本来の美しさがどんどん失われていくことを嘆かれていましたが、そのお方は「それでも日本人はずっと、芯からにじみ出る美しさ、過剰ではないが揺るがない強さを秘めた美しさを持って生きてきました。」



と、二筋の光を感じる言葉に、先生の美しき生き方が重ねられました。戦火の中、なけなしの麦ご飯で友人が作ってくれた貴重なおにぎり・・・先生自身はそのおにぎりを口にするにはなかつたけれど、配られたおにぎりを口にした子供の笑顔。

禅僧のいう「強さを秘めた美しさ」そのものです。読み返すたびに胸が熱くなりました。

「おいしいおにぎりは、ご飯の熱で掌が赤くなるくらい我慢してください」と・・・  
便利さ、効率という言葉が主流

を占める昨今、おにぎり一つを作るにも、ただ理屈でなくおいしいおにぎりをひたすら自分手で握ること・・・見習いたいものです。最後に、先生から葉書をいただきましたことを紹介します。

毛筆で「上野の里は紅葉でつつまれ、木のささやきに穏やかな日々を・・・」それはそれは達筆で、とつてもうつくしい字でした。パソコン頼りの日々ですので、返事を書くのに相当苦労しました。毛筆には毛筆でと、ただ美しく書きたいの一心で。

後日、先生にお会いしたとき下手な字で申し訳ないようなことを申しましたが、なんと先生のお言葉「柴田さんの顔を思い浮かべながら、心をこめて丁寧に書いただけですよ」と脱帽です。

今回、荻迫先生を偲んでの文章を書かせていただいて本当にうれしく光榮に思っています。

先生との出会い大切にしていきたいです。ありがとうございます。

く・・・く・・・く・・・く・・・

以前、荻迫喜代子先生が会報に寄稿してくれた文を紹介します。

おにぎりにこだわって

荻迫 喜代子

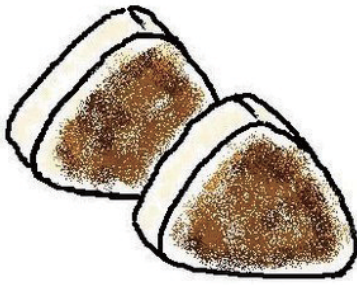
昭和二十年の三月十一日、東北大震災と同じ日ですが、当時学生の私は東京から帰省する日でした。前夜は激しい大空襲で、東京はほとんど焼き尽くされ、あちらこちらには残骸がくすぶり続けていました。

私は赤羽の友人宅に下宿していましたが、この夜の空襲はまぬがれましたものの、数日後には焼失しました。帰心矢の如しの一念で東京駅までどう行こうかと迷いましたが、線路をたどる以外に歩くところがありません。焼けた熱い線路の上を黙々とたどりました。列車や貨物列車もすべて焼けて、骨組みだけの無残な状態でした。



神田川では石炭運搬船が真赤な？ガラ？になって浮いていました。やっと東京駅にたどり着きました。駅はランドウで東海道線は品川駅からの発車ときき、又歩いて品川に着いたのは夕刻に近かったと思います。ホームには焼け焦げた防空頭巾をかぶり全身真黒に焼けた人達ばかりで溢れていました。地方へ避難する方達です。皆無口でおし黙ったまま列車の到着を待っていました。

私はフト、おにぎりを沢山持っている事に気付きました。私が九州まで帰ると云うことで、当時数日かかるだろうと友達はなげなしの麦ごはんを炊いておにぎりにし、味噌をつけて焼いたものを持たせてくれました。何よりも貴重で有り難い食糧でした。真黒になって



いる子供達がふびんで一ケづつ配りましたが、あの時の初めて見せた笑顔は忘れられません。気付いたら自分のものまで全部配り、それから四日目に自宅へ帰り着きましたが不思議にひもじさは無く、途中は水だけで過ごせました。

この様な経験から、にぎり飯には深いこだわりがあります。おいしく握るコツは、先ず熱いご飯である事です。冷たいご飯はうまく握れません。又混ぜものの多いご飯、つまり昔の糧飯（雑穀めし、大根めしなど）は握るのに苦労した事でしょう。炊きたてのご飯は、ほぐして息をぬき、手をよく洗って掌に塩をつける。ふんわりとのせたご飯はやや締め握る。二つ目からは塩のみで握ります。水をつけたり、塩水をつけたりではうまく握飯にはなりません。ご飯の湯気で塩がとけ、おいしいおにぎりになるのです。ご飯の熱で多少掌が赤くなるくらい我慢して作ってみてください。握飯には梅干、たくあんが似合いのもですが、握ったむすびの周囲に自家製の麦みそをなすりつけ両面を焼きます。味噌の焦げる香りが何とも云えませんし保存性も高くなります。私は大きい高取焼の皿にハランを二〜三枚敷き、おむすび、玉子

焼、椎茸や筍、高野豆腐などの煮染め、たくあんを盛り合わせて、素朴な中に温かい昼食のもてなしをしたりします。握飯のおかずは、あまり凝りすぎない方がおいしくいただけるような気がします。

## 活動の記録

●平成二十五年 古高取基礎研修講座  
△平成二十五年七月〜十二月  
場所…えみくる  
(直方市男女共同参画センター別館)

本年度の学習部会は『史料によ



る茶の歴史と茶の初見から千利休切腹まで』という題目で、文献史料を用いて四回の講義を実施しました。また、昨年の十二月七日(日)には、講座の最終講義として、九州大学教授の、中野等氏による『豊臣秀吉と文禄・慶長の役』という演題の講演会も実施しました。ご参加くださいました皆様、ありがとうございました。

講義の概要は、ページ3にまとめています。

●平成二十五年 子供焼物教室  
△平成二十五年七月〜十二月

今年度の六年生対象焼物教室を無事終え、ほっとすると同時に五年目ともなると各校の行事の一貫として定着してきたことに喜びを感じています。昨年度より市内十一校全校が子供達が作ったマイ茶碗でお茶会を開催するまでに至り、私たち焼物教室部会はともうれしく思っています。

毎年二、三校のお茶会に伺ってお手伝いをしながら、子供達の緊張した表情でお茶の作法を学んでいる様子を拝見し、微笑ましくもありまた感動を覚えます。



お茶の伝統文化にふれるすばらしい経験は子供達にとつて一生忘れがたい思い出となると思います。直方が古高取の発祥の地であることを誇りに思い伝承して行ってくれることを願って、来年度も子供達と楽しく焼物教室を開催して行きます。

永富セツ子



●直方のお室「古高取」の鑑賞  
&窯元めぐり(ちよっくらふれ旅)  
平成二十五年十一月十六日(土)  
集合場所…直方中央公民館  
参加者…十七名

中央公民館資料室「宅間窯跡」花公園(昼食)「清水窯」末吉窯「福智山ダム内ヶ磯窯跡」というコースで、会員の副島氏の説明を聞きながら巡りました。「かさこそと秋の深みを歩きけり」の一日でした。

古い・深い・うつくしい・新しい・やさしい・きびしい 古高取の魅力が強めたのですが、現在の資料室の展示の有様が粗雑です。是非見直しを図ってもらいたいし、その事に「伝える会」も参加すべき



事項と思われまます。そして、「伝える会」の重点事項であります資料館の設置に向けての足がかりになればと考えた事でした。何故なら宝物は持ち腐れてはいけないからです。

鷹取宗恵

●秋の里山散策  
&森のご馳走ランチ  
(ちよっくらふれ旅)

平成二十五年十一月二十三日(土)  
場所…里山もとどりハウス  
参加者…三十二名

「里山紅葉めぐりと山のご馳走ランチ」は三十二名の参加があり担い手を入れると五十人くらいの人が集まり大賑わいでした。

「ちよっくらふれ旅」の企画の中で一番人気だったそうです。

里山の自然にふれながらの散策と(ヤギも同行)山のご馳走ランチは魅力なのでしょう。アンケートで来年も是非参加とありました。元気をもらいました。

末松登志子

●福岡市内散策ウォーク  
高取西皿山を探ねて  
平成二十六年二月二日(日)  
集合場所…地下鉄唐人町駅  
参加者…二十一名

朝は曇り空、昼からは晴天の上天気になり温度も上がり汗をかく中での散策でした。

午前十時にスタートして、午後三時、西新駅(地下鉄)で解散しました。

参加された皆様、ご苦勞様でした。

副島邦弘



## なんでも掲示板

### ●お茶会に参加しました

平成二十五年十一月十三日(水)  
場所：感田小学校  
平成二十五年十一月十五日(金)  
場所：直方歳時館

感田小学校六年生三十一名は、教室で、直方南小学校六年生十六名は、直方歳時館で自分で作ったマイ茶碗でお茶会に参加しました。感田小学校では教室が茶室に代わり設けた床の間には、破草鞋“



(はそうあい)と書かれた横物の軸が掛かり日常とかけ離れた空間を楽しみました。

”破草鞋“とは、ちぎれた草鞋(わらじ)のこと。この語は、草鞋が破れるほど努力を積むことが大切という意味から中学生に旅立つ六年生の皆へのエールの気持ちで日隈先生が掛けてくださいました。マイ茶碗の形は様々ですが、自分なりに茶筌を振ってお抹茶を自服しました。

南小学校は直方歳時館でのお茶会です。和室の畳の上をそろりそろりと歩き正座して薄茶席を体験しました。菓子のいただき方、抹茶のいただき方、茶道の歴史など学びました。

今年は、”おもてなし“という言葉葉が話題になっています。お茶会を通して子供たちと交流し日本の文化のおもてなしの心にふれた一時でした。

田中紀子

### ●直方のお室「古高取」の鑑賞 & 窯元めぐり(ちよっくらふれ旅)

平成二十五年十一月十六日(土)  
集合場所：直方中央公民館

はじめて参加しました。高取焼の窯元にはじめて行きました。とても感激しました。昔の焼物の感じがしてとても良かったです。色も型も古典の感じを残されていて良いと思いました。もっとアピールしたら良いと思いました。

福智山の窯跡も良かったです。ダムに沈んで残念ですが、また何百年後に現れる事を信じています。「しらく」の話ははじめて聞いてとても面白かったです。古高取を伝える会には、「しらく」のごたる女性はいませくん。

お弁当もおいしかったです。お茶にコーヒーまでいただき本当にありがとうございました。花公園も楽しかったです。思いがけなく紅葉が見られて楽しかったです。こんなに楽しいなら、もっと友達も誘ってくれば良かったと思います。

上野、福沢、升水



### ●「ふくおか官兵衛くん」の兜について

黒田官兵衛がかぶった兜について紐解いてみましょう。

現物は現在、岩手県盛岡市中央公民館に収蔵保存されている。何故、この盛岡の地にあるのか疑問が湧いてくる。

この兜の正式の名称は、銀白檀塗合子形兜(ぎんびやくだんぬりごうすなりかぶと)という。戦国武将としての官兵衛のいでたちを今に伝えるものである。

この兜は一説によると、南北朝時代の武将赤松円心が所持したもので、後に官兵衛の妻幸圓の実家である櫛橋家に渡り、その縁で官兵衛所有になったという。外鉢の高さが28.2cmで前後の径が27.8cmで、ふた付きの漆椀である「合子」をかたどり、朱銀・錫を箔押しした上に生漆をかけている。

「如水の赤合子」と呼ばれ、戦場で恐れられたといわれるこの兜を、官兵衛の臨終に際し、形見として黒田家中の一の家老、栗山四郎衛門利安(善助)に与えた。本来なら息子長政に与えられるはずのものだが、遠慮なく長政の国政を補助できるよう、善助に贈られ



たというものである。その後善助の子大膳と官兵衛の孫である忠之と衝突、いわゆる「黒田騒動」を引き起こし、幕府の裁定によって、栗山家は、盛岡藩に流された。それとともに兜も盛岡藩主の南部家に献上された。

この兜にも深い黒田家との歴史が刻まれている一品である。

副島邦弘



## 古高取紹介

今号から「古高取」に関係する様々な情報を掲載することに致しました。初回は「永満寺宅間窯跡」です。

### 【永満寺宅間窯跡】

直方市永満寺に所在する江戸初期の窯跡。鷹取山の西南斜面、釜床池の畔にある。高取焼発祥の窯



跡で、慶長十一年（一六〇六）福岡藩主黒田長政の命により、朝鮮陶工八山（高取八蔵）が開窯し、慶長十九年に内ヶ磯に移すまで操業。発掘調査により、焼成室七室（焚口を含む）の割竹式登り窯が検出された。窯の中軸線は直線をなしており、朝鮮李朝中期ごろの窯構造に類似する。窯本体は焚口を削平した排土を盛り土して築窯されており、焚口の標高を2.2mに置き、全長16.6m、全体の傾斜角は約十二度だが、一く五室までの傾斜は緩く約六度である。窯

内の出土品は大半が窯道具類で、製品としては茶碗・水指・皿（向付）・瓶・片口・壺・鉢・甕・播鉢などであり、茶入・蓋類の出土はみられなかった。釉薬の種類には灰釉（土灰釉・木灰釉・藁灰釉）・鉄釉・長石釉があり、主体は土灰釉で長石釉は少ない。当窯の特色としては、藁灰釉が還元炎により海鼠釉となったものや、土灰釉が黄色く変化したものがある。釉が厚く掛けてあるため、底部には釉溜まりがみられるものが多い。成形上の特色は、一般的に高台がやや低くて作調も鈍い。ロクロ水挽き成形が主であるが、片口や播鉢類は叩き成形である。胎土の耐火度が低いために焼成の折の歪みが多い。

副島邦弘

次回は、「古高取内ヶ磯窯跡」の予定です。どうぞお楽しみに！

### 〈掲載内容募集〉

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。掲載可能な情報等がございましたら、事務局までご連絡ください。

### 〈編集後記〉

新年になり、あつと言う間に一ヶ月が過ぎました。ここ数年毎年のように一月に風邪をこじらせているような気がします。年齢の為でしょうか？あるいはまた不規則な生活の為でしょうか？

いずれにしても体が一番の資本ですので用心です。会員の皆様にも健康に注意していただき、今年一年間をまた一緒に頑張りましょう。皆様、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO16

### 〈発行〉

古高取を伝える会

### 〈発行日〉

平成二十六年二月十五日

### 〈現在の会員数〉

正会員 六十四名（六十八日）  
賛助会員 九名（十四日）  
団体 一団体（二日）

### 〈マイ茶碗の数〉

4298個

### 〈事務局〉

〒八二二一〇〇二六  
福岡県直方市津田町七十四  
TEL 〇九四九（二三）二二二